

【答えのない問い】

SDGs～わたしたちにできること～

【実践者】

氏 名	夏堀 隼也	学校名	千葉市立宮崎小学校
担当教科等	教務主任	対象学年（人数）	4 年（123 名）
実践年月日もしくは期間（時数）	2024 年 10 月 ～ 2 月（30 時間）		

実施概要

01 実践する教科・領域

総合的な学習の時間

02 単元名と単元目標

単元名：SDGs～わたしたちにできること～

単元目標：世界や日本を多様な視点から見て、持続可能な社会を創るために自分ができることを考える。

関連する学習指導要領上の目標：探究的な見方・考え方を働かせ、目的や根拠を明らかにしながら、課題を解決し、自己の生き方を考えることができるようにする。

03 単元の評価規準

① 知識・技能	世界や日本の SDGs 的な課題や現状についての知識を身に付け、課題解決のためにできることを理解している。
② 思考・判断・表現	世界や日本の現状から、問いを見だし、情報を集め、整理・分析して、他者との協働をとおして、自分の考えを更新している。
③ 主体的に学習に取り組む態度	持続可能な社会の創り手として、未来の世界を想像し、そのために今できることやこれからの生き方を考えようとしている。

04 単元設定の理由・単元の意義

SDGs とそれらに関わる世界や身の回りの問題や現状、対策について、一人一人が課題を設定し、探究的な見方・考え方を働かせて学びを構築することができるよう、単元を設定した。

〈児童/生徒観〉

本学級の児童は、SDGs という言葉は知っているが、世界や日本の様々な課題を自分ごとと捉えることや、自分の行動がそれらとつながっている感覚をもつことができていない。また、個々に課題設定し、調べることはできるが、友達と協働することでより自分の考えが深まるよさを実感できていない。

〈指導観〉

単元の前半（1～15 時間目）は、パラグアイや身の回りの出来事と SDGs との関連に気付くことで関心を持ち、すごろくづくりを進める中で知識を身に付けられるようにする。後半（16～30 時間目）は、前半で得た知識から、自ら問いをつくり、友達と協働的に探究する過程で、理想の未来のために何ができるか、自らの生き方を考えられるようにし、持続可能な社会の担い手としての資質・能力を育みたい。

05 単元計画（全 30 時間）

	小単元名	学習のねらい	学習活動
1 ～ 3	SDGs って	SDGs について関心をもつ。	・SDGs メガネをつけて、パラグアイを旅する。 ・SDGs メガネをつけて、身の回り（日本）を見つめる。 ・SDGs すごろく（日本パラグアイ編）を行う。
	資料・教材など パラグアイ地図、SDGs カード、パラグアイ写真、学校や地域の写真、 SGDすごろく（日本・パラグアイ編）、ワークシート		
4 ～ 15	オリジナル SDGs すごろくをつくろう	SDGs のうち、自分の関心をもったものについて情報収集、整理分析し、表現する。	・SDGs のうち関心のあるものを選ぶ。 ・SDGs の目標、問題・現状、対策などについて調べる。 ・わかったことをもとに、オリジナルすごろくを作る。 ・オリジナル SDGs すごろくをやって、わかったことやモヤモヤしたことをフィードバックする。
	資料・教材など 『共につくるわたしたちの未来（JICA）』、SDGs CLUB、NHK for school、 SDGs に関する本、タブレット（発表ノート）、すごろくの白紙マス		
16 ～ 18	SDGs について問いをつくろう	SDGs について、モヤモヤから問いをつくることができる。	・元 JICA の戸田隆夫さんの話を聞き、2050 年の世界を想像し、そのためにできることを考える。 ・これまでの学びでのモヤモヤから問いを作る。
	資料・教材など 戸田隆夫さんのスライド、問いカード、ワークシート、タブレット（発表ノート）		
19 ～ 22 本時	SDGs について対話しよう。	SDGs についての問いに対して、友達と協働で探究する。	・問いについて、友達と対話することを通して、自分の考えを更新する。
	資料・教材など 問いカード、タブレット（発表ノート）		
23 ～ 28	自分の問いをさらに探究しよう	友達との対話を経て、さらに情報収集し、整理・分析し、まとめることができる。	・自分の問いについて、さらに調べたり、整理したり発表ノートにまとめたりする。 ・戸田隆夫さんからの問いに向き合い、自分の考えを深める。
	資料・教材など タブレット（発表ノート）		

29 30	2050 年の理想の世界へ	・自分の問いや戸田さんからの問いについて、自分の考えを表現することができる。	・自分の問いについてまとめたことを、友達に発表する。 ・2050 年の世界やそのためにできることを発表する。
	資料・教材など タブレット（発表ノート）		

06 本時の展開（20 時間目）

本時のねらい：個々の問いについて、友達と話し合う協働的な活動をとおして、自分の考えを更新することができる。（思考力、判断力、表現力等）

過程・時間	教員の働きかけ・発問および学習活動・指導形態	指導上の留意点（支援）
導入 (5分)	1 これまでの学びを振り返り、個々の問いについて、協働的に話し合うことについて見通しをもつ。	○SDGs について関心をもち、すぐろくをとおして、知見を広げ、自分の問いをつくってきたことを想起させ、称賛する。
展開 (35分)	2 3人組で、個々の問いについて話し合う。 (児童 ABC の反応例) ・A が発問者となり、話し合う。 A 世界平和が大事、戦争はしたくない、と考えられているのに、現在世界では数十の戦争・紛争があり、数十万人の子供兵士がいるとされています。戦争のない世界はおとずれるのでしょうか。 B 人間はこれまでずっと戦争を繰り返しているから、戦争がなくなることはないんじゃないかな。 C 民族や領土が分かれているから、お互いのことを理解したり尊重したりするのは難しいと思う。 A 言葉が違っても、翻訳アプリでお互いのことを伝え合えれば理解し合えるんじゃないかな。 ・B が発問者となり、話し合う。 ・C が発問者となり、話し合う。	○問いについて友達と話し合うことで、より考えが深められるよさを示唆する。 ○問いと向き合うための前提知識に大きな差が出ないように、同じ（または近い）SDGs の番号同士でグループを編成する。 ○個々の問いカードを参考に、世界や日本の現状や問題を示してから、問いを投げかけるように促す。 ○発問者に対して、何かしら自分の考えを伝えられるようにする。 ○話し合いが行き詰まった場合には、批判的な見方（あえて違う見方）や自分事な見方（自分だったら）ができるように、見方を変えるよう助言をする。
まとめ (5分)	3 話し合いを経て、自分の考えを書いたり、さらに調べたりする。 ・B さんが過去の戦争のことを言っていたな。これまでに戦争は増えているのか減っているのか調べよう。減っているなら、そこに平和へのヒントがあるかもしれない。	●他者との協働をとおして、自分の考えを更新している。（思考・判断・表現）

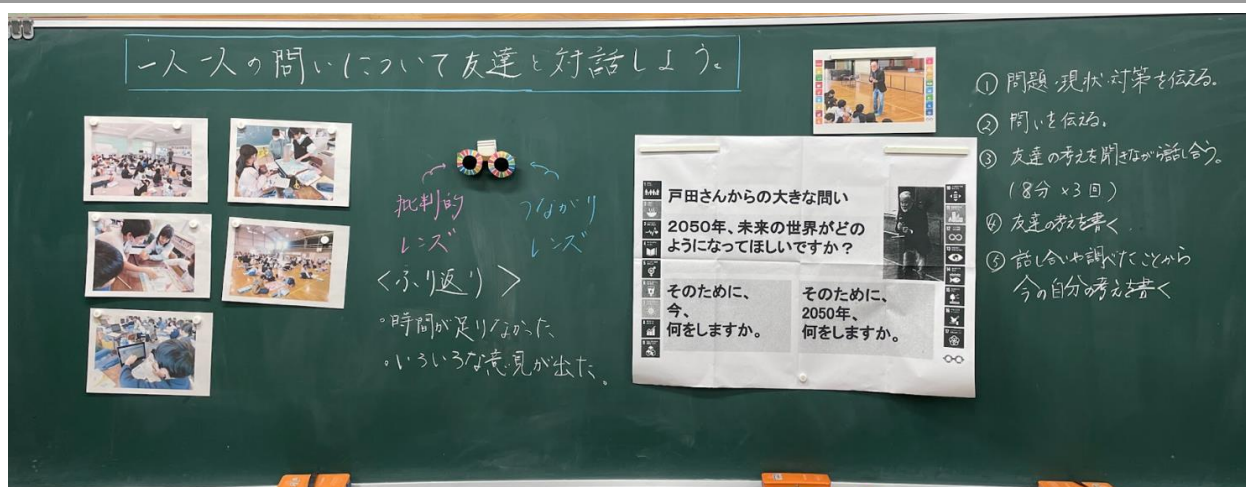
	4 学びを振り返り、共有する。 ・友達と話し合ってみて、平和を実現することが簡単ではないことに改めて気づいた。でも、少しでも失われる命や犠牲となる子供兵士を減らすために自分ができることを考えたい。	○友達と話し合うことで、自分の考え方に変化が生まれたかを振り返られるように問いかける。 ○より考えを深めることができた児童がいたら共有し、協働することのよさに気が付けるようにする。
--	--	--

使用する資料・教材：

- ・ 問いカード（児童が作成）
- ・ タブレット（発表ノート）
- ・ これまでの学びが想起できる掲示資料

（SDGs すごろく日本パラグアイ編・オリジナル SDGs すごろく、戸田隆夫さん授業の様子等）

07 板書計画



08 評価規準に基づく本時の評価方法

- 話し合う様子の観察
- 話し合い後に、問いカードに、友達の考えと自分の考えを書けているか。

09 学校外との連携（※該当のある場合）

16 時間目（12 月 11 日）元 JICA 上級審議役・現 Forum2050 代表 戸田隆夫さんの出前授業

10 学びの軌跡（※児童生徒の発言の変化など）

1 時間目、「SDGs メガネをつけてパラグアイを旅しよう」では、パラグアイで見たことなどを紹介したが、日本と比べて「貧しい、分別ができていない、森林伐採はだめ。」などの否定的な反応が多かった。地球の裏側の国で起きていることであり、「自分には関係ない」「気になる SDGs がない」という意見も見られた。

4～15 時間目は、「SDGs オリジナルすごろくをつくろう」では、SDGs について調べたことをアウトプットする方法として、すごろくのマスを作った。問題や課題は○マス戻る、良い現状や対策は○マス進むというマスにすることで、「興味が湧いてきた。」「少しずつ気になってきた」と関心や知識が高まっていく様子が見られた。

16 時間目、元 JICA 現 FORUM2050 代表の戸田隆夫さんの授業を受けた。戸田さんが経験した世界の現実に想像力を働かせながら聞き入り、衝撃や感動があったようだ。「2050 年、どんな世界であってほしいか」「そのために何をしたいか」「未来を作るのは君たちだ」という言葉を受け、世界の問題も自分ごととして捉え始めている様子が見られた。

17 時間目から、一人一人の問いを作り始めた。すごろくを作る過程でモヤモヤしたことや戸田さんの話を聞いてモヤモヤしたことから、問いを書き出した。その中から「友達と話し合いたい問い」「答えが一つではなく、追究しがたい問い」に精選した。その段階で進んで対話を始める子もあり、問いについて話し合いたい意欲が高まっていると感じた。

19、20、21 時間目に、一人一人の問いについて友達と対話した。批判的レンズで物事を多角的に見ること、つながりレンズで統合的に見ることを推奨すると、「でもさ、こう考えることもできるんじゃない」「これとこれはつながっているんじゃない」などと対話の深まりが見られた。友達の意見を受けて、自分の問いに対する今の考え方をもち、今後さらに問いについて探究していこうとする姿勢が見られた。

11 海外研修で何を学び、どの部分を児童生徒に伝えようと思ったか

パラグアイで見た貧困、国際協力、ルーツ・アイデンティティーの問題、マイノリティーなどについて、深く感動したり考えさせられたりした。眠れなくなるほどモヤモヤしたことを、振り返りの時間やバスの移動中に仲間と対話する中で、考え方の違いを含めて大きな気づきがあった。それらをもとに自分の考えを更新する、そのような日々こそが自分にとっても最も価値のある学びだったと振り返る。そして、そのプロセスは、総合的な学習の時間における「探究のスパイラル構造」と同様であることを教わり、子どもたちが「探究モード」で学びを築き上げる姿を目指そうと考えた。

12 苦労した点

パラグアイでの自分自身の学びは、それを実際に見て聞いたからこそ生まれたものであり、子どもたちにとっては「知らない国の知らない出来事」である。「へえ。」と思うことはあっても、どうすればよいか真剣に考えるには至らなかった。すごろくづくりという活動を入れることで、楽しみながら知る、という経験はできたが、本やインターネットの情報を書くにすぎず、表面上の知識となっていたことも課題だった。そこで、戸田さんという世界を広く回った方のお話を聞くことで、本気になり「自分ごと」に近づいた瞬間が分岐点となった。

授業を進める上で一番の悩みは、「一人一人が答えのない問いをつくれるのか」「友達の問いに対して真剣に話し合えるのか」だった。すごろくで積み重ねた知識と、戸田さんから揺さぶりがあったためか、子供たちなりの問いを立て、対話が深まっていたのが印象的だった。

13 改善点

- ・感動を伴うような体験的活動を取り入れるべきであった。
- ・多様な他者（外国の方や企業の人など）との交流を取り入れるべきであった。
- ・学年の先生方と授業実践を進める上で、情報共有や協議を密にする必要がある。
- ・次年度以降も進められる「探究的な学び」を確立すべきである。

14 成果が出た点

- ・初め「他人事」だった世界の出来事や自分達の未来について、「自分ごと」となった。
- ・答えのない問いを立てることができた。
- ・友達と対話する中で、批判的に物事を見たり物事の関連性に目を向けたりすることができた。

15 自由記述

授業について、長い期間たくさんのことで悩んだ。それらを最初は相談することができなかった。学年の先生方は多くの業務を抱えており、授業について相談することが憚られたからだ。しかし、学びが始まり進むにつれて、少しずつ相談したり協議したりすることができるようになった。先生方との協議をとおして、一人で悩んでいるときには思いつかなかった進め方や考え方に気付くことができた。これら、授業作りも「答えが一つではない問い」に対話的に向き合い、自分なりの答えを更新し続けるという貴重なプロセスであったし、ものすごく充実した日々であった。